

暴力の連鎖を断ち切るために

杉山 春

これまで虐待事件を何度か取材し、繰り返し暴力とは何かを考えてきた。現在は、「暴力とは他者を自分の思い通りに動かそうとすること」と考えている。暴力を受ける側は、自分自身の心、体、魂の全てを使って生きることができない。それはとても苦しいことだ。「愛情による暴力」というものもある。

私は不仲な両親の下で育った。両親はキリスト教無教会主義の信仰者でもあり、父は終生その生育歴を背景に、母の信仰よりも自分の信仰が正しいと思っていた。母は父への不満をためていたが、自分の信仰の方が劣るのではないかとの疑いも密かに抱えていた。また、女性であるために社会的な活動ができないことにも強い不満があった。その思いを繰り返し聞かされた私は、長年母の思いを内面化し、母の抱えた価値観の外側に出ることができなかった。

私の息子は小学校2年生の6月、学校に行けなくなった。私は当時、『ネグレクト—真奈ちゃんはなぜ死んだか』を書き上げたばかりだった。事件の両親は、女兒の発達の遅れが明らかになると幼い娘を隠し、誰にも会わせなかった。

息子が不登校になったとき、まず、家族を閉じてはいけない、他者に頼らなければいけないと考えた。児童精神科医を息子と夫の3人で受診した。息子と一対一で話し合った医師は、フリースクールに通わせることも考えるという私達夫婦に、「大人が先に決めてはいけません。息子さんは育つ力をもっています。その力を信じましょう」と言った。「育つ力がある」という言葉で、息子の他者性を実感した。私の思惑とは別のところで、息子は育つのだ。

もう一つ大きなことは、私は自分の判断を信じていいと知ったことだった。息子の治療として2週間に1度医師と話をしたが、医師は毎回私の考えや判断を肯定した。私の考えを正すときは、丁寧に説明した。

暴力の連鎖とは、上の世代、あるいはより力のある者の価値観の中に閉じ込められることではないか。もっとも若い者の言葉に真摯に向き合うとき、私たちは変えられていく。



PROFILE

すぎやまはる：ルポライター。早稲田大学第一文学部卒業。雑誌編集者を経て、現職。子育てや親子問題等をテーマに取材・執筆を重ねている。著書に、『ネグレクト—真奈ちゃんはなぜ死んだか』（小学館、2004）、『ルポ 虐待—大阪二児置き去り死事件』（ちくま新書、2013）、『児童虐待から考える—社会は家族に何を強いてきたか』（朝日新書、2017）などがある。